



# 福澤、陸奥の「理」よ再び！

VOL. 22 NO. 11 November

渡辺利夫

拓殖大学学長

「文に属する攻略にして独りその働きを逞うすること甚だ易からず。必ずや武力の之に伴う者あるに非れば攻略の目的に達するに足らず」（福澤諭吉「東洋の攻略果して如何せん」『時事新報』）。

『時事新報』とは福澤が自説の展開のためにみずから創刊した日刊紙である。もちろんこの文章も福澤自身のものである。文中の「文に属する攻略」とはつまり外交のことである。武力を背後にもたなければ外交それ自体成り立たないという「理」を絶対に忘れるな、といたっているのである。往時の日本の「利益線」（山縣有朋）たる朝鮮に勢力を伸張するには、朝鮮が服属する大国の清国と対抗することは避けられず、対清外交に際しては軍力の備えがなければ到底敵わぬことを凜とした文章で書かれたものがこの論説であった。

日清戦争の全局を指揮した時の外務卿が陸奥宗光である。陸奥には『蹇蹇録』と名付けられた、政治家の語りとしてはおそらく稀代の名著といっている著作がある。日清戦争勃発の原因となった朝鮮半島における東学党の乱に始まり、戦局のありよう、戦争勝利によって手にした遼東半島を三国干渉によって清国に還付せざるを得なくなるまでの経緯をみごとに描き切った著作である。陸奥は末期の肺結核に悶え苦しみながらこの著作の執筆に全力を傾け、書き終えて間もなく蒼天に上っていった。陸奥は日本の歴代の外務大臣の中でも傑出した外交官であり、事実、現外務省の庭にひとり立つ銅像も陸奥その人である。三国干渉を余儀なくされた陸奥は、結局のところ外交のみで相手からの譲歩を勝ち取ることはまず不可能であることを徹底的に知らしめられた。

「要するに兵力の後援なき外交は如何なる正理に根拠するも、その終極に至りて失敗を免れざることあり」

『蹇蹇録』最終章の最後のところで、結局は自分がいいたかったのはこれだといわんばかりにそう認めたのである。

現在の日本を取り巻く極東アジアの地政学的状況は開国維新から日清戦役開戦前夜のそれと酷似していると私はみる。中国はもとより韓国、北朝鮮、そしてロシアまでが日本に挑戦的外交をもつてのぞんでいる。中国、韓国の反日政策はもはや「構造化」されている。中国はミサイルの照準を日本に向け、北朝鮮はミサイルを完成し、これに搭載可能な核弾頭の開発に躍起である。北朝鮮はすでに二度の地下核実験を終えている。照準は日本である。拉致被害者の数はおそらく数百人に上ろう。日本は竹島の不法実効支配という屈辱を韓国から与えられている。にもかかわらず、日本政府は集団的自衛権行使についてもかわらず、日本政府は集団的自衛権行使についての旧来の解釈を変えようという気概がない。北朝鮮貨物検査特別措置法（臨検法）の成立やインド洋での給油支援活動の継続もあやしく、PKO（国連平和維持軍）においてはG8（先進八カ国）だけでなく中国、韓国の後塵をも拝している。要するに現在の日本人の安全保障認識は何とも安穩なのである。ならば、開国維新から日清・日露戦役開戦前夜において日本の政治指導者やオピニオンリーダーが当時の緊迫の国際環境をいかに認識し、この認識に立っていかに行動したのかを研究し直す必要がある。その際、福澤と陸奥は、私どもにとって最適のテキストとなろう。